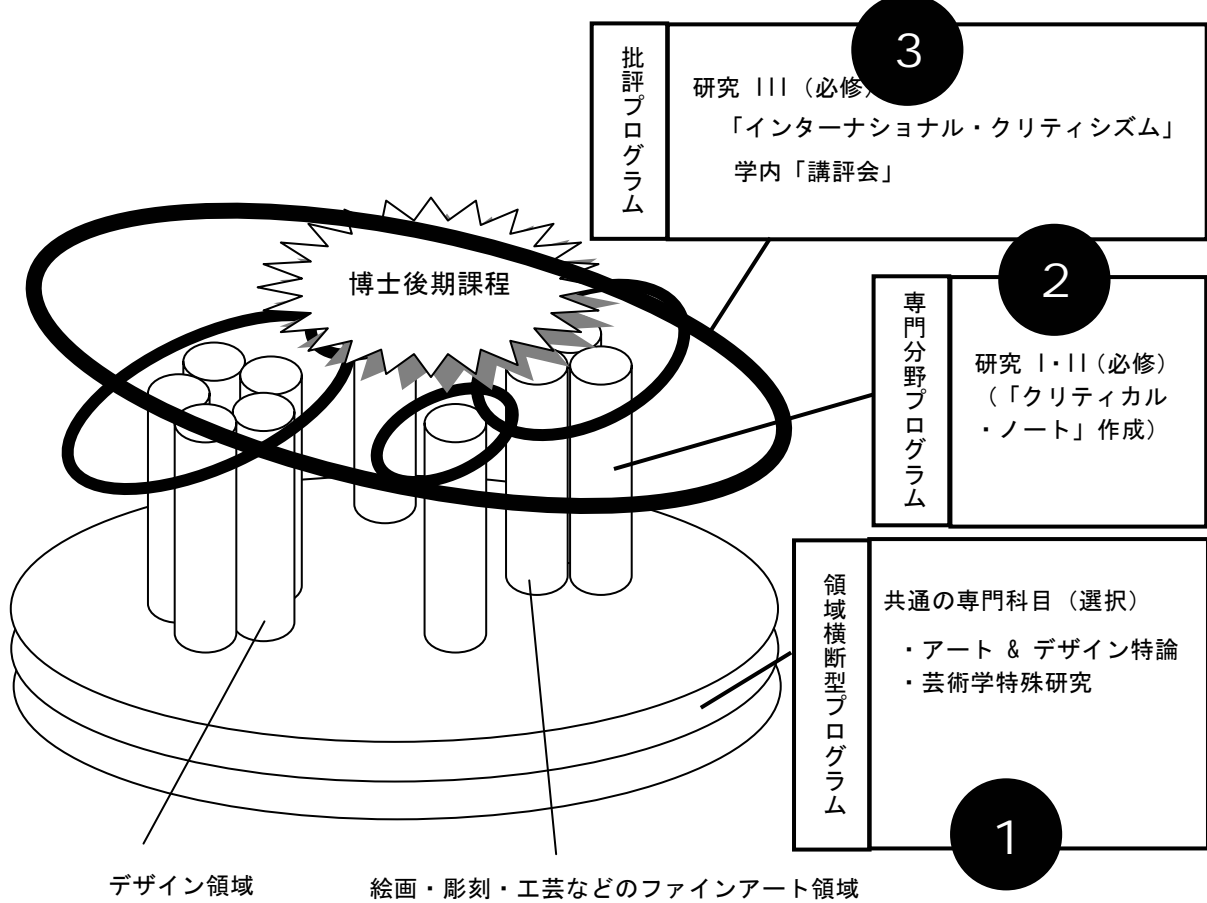


## 教育プログラムの概要及び採択理由

機 関 名	多摩美術大学	申請分野(系)	人社系
教育プログラムの名称	異文化相互批評が可能にする高度人材育成		
主たる研究科・専攻名	美術研究科デザイン専攻		
(他の大学と共同申請する場合の大学名、研究科専攻名)			
取 組 実 施 担 当 者	(代表者)岩倉 信弥		
<p>[教育プログラムの概要]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 本申請プランは、本学大学院博士前期課程・博士後期課程の中で、               <ol style="list-style-type: none"> <li>(ア)最も特色ある教育カリキュラムである「講評会」に注目し、</li> <li>(イ)「講評会」を応用・発展させることで、＜国際的な教育機関との連携の中で相互批評教育「インターナショナル・クリティシズム」(国際講評会)を実現、それを高度美術・デザイン教育の磁場として、柔軟で総合力に満ちたディレクター型人材を育成していく教育カリキュラム＞の創出を目指すものである。</li> <li>(ウ)「講評会」は超領域的批評の場・・・本学では、学部から博士前期課程・博士後期課程まで習慣づけられている発表会形式の審査会・評価会を「講評会」と称している。博士前期課程では2年間で4回、博士後期課程では3年間で6回程度開催される。</li> </ol> </li> <li>2. 異文化間で繰り広げる相互批評教育「インターナショナル・クリティシズム」の実現・・・本学で取り組まれている「講評会」を、海外の芸術系教育機関(大学院レベル)との連携の上に組み立て、双方の学生による作品発表・研究発表に対し、双方向の批評を加えようとするものである。ここで期待するのは、言語、習慣、宗教、経済、文化、歴史、芸術素養、総合的な価値観などから生じる異文化間の健全な衝突であり、それを乗り越え、理解し合い、人的交流を育成することである。「学生の作品と批評を中心に据える」ことで、はじめて可能となる高次元の交流であり、高度な美術・デザインの分野での人材育成へとスムーズにつながっていく。</li> <li>3. 定期的な開催・・・この「インターナショナル・クリティシズム」は、アジア、ヨーロッパ、アメリカの海外教育機関と連携することで、平成20年度より、少なくとも1年に一度は海外で、そして同年度中に一度は国内に先方を招く形式で開催したいと考えている(採択期間終了後も大学が費用を負担し継続する)。</li> <li>4. ただし、批評交流という教育効果を鑑み、渡航する学生は10～20名程度に抑える。その代表学生選出にあたっては、後述する「クリティカル・ノート」というシステムを用い、先方教育機関に依頼する。選出された学生は、作品を携え渡航する。反対に、先方の参加学生については本学から選出する(開催地の方が参加学生数は当然多くなる)。</li> <li>5. 国内で「インターナショナル・クリティシズム」を開催する回には、本学対象学生は全員参加する。本学学生以外にも、全国の教育機関と連携し優秀な学生の参加を積極的に呼びかける。規模によっては、都内のホールなどを使用する必要が出てくるものと思われる。</li> <li>6. 「クリティカル・ノート」というコミュニケーション・ツール・・・「インターナショナル・クリティシズム」開催に先駆けて、双方の学生が、制作中の作品、研究サマリーなどを収録しておく公開型のデータベースである。双方の学生は「クリティカル・ノート」を日常的なツール、制作のプロセスを記録するダイアリーとして使いこなしていく。「インターナショナル・クリティシズム」に参加する学生の選出は、双方が、この「クリティカル・ノート」を参考にしながら進めることになる。</li> <li>7. 前後するが、「インターナショナル・クリティシズム」を有効に機能させるために、既存の横軸型授業(「アート&amp;デザイン特論」など)、専門系の「研究I・II」などカリキュラム上でも十分対応させる。「インターナショナル・クリティシズム」を含む「講評会」は、「研究III」の評価対象とするよう学則変更で対応する予定である。</li> <li>8. 「インターナショナル・クリティシズム」の成果は、グラフィカルな出版物、ブログ、作品データベースなど様々な角度から報告され、すべてオープンなかたちで公開される。本学では、1999年度以降、800人以上の修了論文・作品をネット上のデータベースに収録、整理、公開してきた。こうした習慣の上に、「クリティカル・ノート」は無理なく設計されている。</li> </ol>			

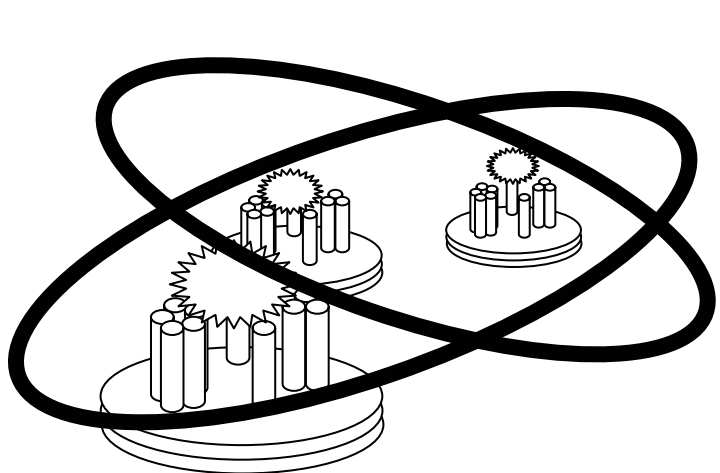
履修プロセスの概念図（履修指導及び研究指導のプロセスについて全体像と特徴がわかるように図示してください。）



博士前期課程の土台として領域横断型プログラムがあり、その上に専門分野プログラム・批評プログラム、さらには、博士後期課程のカリキュラムが位置している。

①・・・「アート&デザイン特論」などを教育効果の高い「領域横断型プログラム」の主軸とする。  
 ②・・・「クリティカル・ノート」は、専門分野のプログラム（研究IおよびII）において指導、実践される。  
 ③・・・いずれの研究領域においても、「研究III」として「講評会」を行う。この発展系として、「国際・クリティシズム」が開催される。

学年展開について・・・① - ② - ③という流れは、学年があがっても連続と繰り返される。  
 発表と公開・・・図では省略しているが、③の後には、発表と内容の公開が控えている。



③に関連して・・・「国際・クリティシズム」実現後のイメージ・・・

国際的な講評会は、これまで述べてきたように言語、習慣、宗教、経済、文化、歴史、芸術素養、総合的な価値観などの健全な衝突を呼ぶことになるだろう。しかしながら、その上で生まれた人的交流ほど、力強く豊かなものはない。

「国際・クリティシズム」開催後は、関係した教育機関すべてにおいて、学生の「瞬発的な能力の開花」が起こるものと期待できる。関連した海外教育機関のみならず、国内の多くの美術教育機関においても、「講評会」、批評プログラムは早期に定番カリキュラムとなっていく。

<採択理由>

大学院教育の実質化の面では、異文化相互批評による高度人材育成という、社会のニーズに対応した人材養成目的が明確に掲げられており、それに沿って専門分野別の縦軸プログラムと、領域横断型の横軸プログラムを組み合わせた体系的な教育課程が編成され、その展開のための充実した指導体制が整備されている点は評価できる。

教育プログラムについては、大学院生の国際化を目指す教育プログラムとなっており、特に海外の大学との連携の上に、双方の学生による作品の双方向批判の場として「インターナショナル・クリティシズム」を定期的で開催するとともに、双方の学生が作品、研究サマリーなどを収蔵する公開型データベースとして「クリティカル・ノート」を「手段」とするプログラムは大学の特性にふさわしい独自の計画と高く評価される。これまでに大学院生の国際化教育に取り組んできた実績からみても、その実現性、実効性が期待できる。ただし、これらの計画を着実に推進するため、海外大学との連携事業については、計画の更なる具体化が望まれる。